

九州大学学術情報リポジトリ  
Kyushu University Institutional Repository

中村哲著述アーカイブ  
Nakamura Tetsu Digital Archive

---

## 丸腰のボランティア：すべて現場から学んだ

ペシャワール会日本人ワーカー 著

中村, 哲 編

### 第七章 「命の水」への挑戦

<http://hdl.handle.net/2324/4772341>

---

出版情報：丸腰のボランティア：すべて現場から学んだ,  
pp.337-387, 2006-09. 石風社

バージョン：初版 2006-09-20

権利関係：©Tetsu Nakamura & Peshawar-kai printed in Japan 2006

石風社より許諾を得て本文を公開しています。

公開しているPDFの印刷、複製および許可のない二次利用はおやめください。



# 第七章「命の水」への挑戦

\* 灌漑水路の第一次通水の瞬間



## 土木の知識生かし、用水路事業に参加

五月の終わりにアフガニスタンとパキスタンの国境トルハムで、PMS（ペシヤワール会医療サービス）が掘った井戸の政府への譲渡式があつて以来一ヶ月半ぶりのトルハム。ペシヤワールで用水路建設に必要な機械を注文した帰り、午後五時に国境を越えてアフガニスタンに入ったのはいいが、入国スタンプを押しもらい車に戻ると鍵が開けられない。ドライバーが車内に鍵を忘れたのである。アフガニスタンでは仕事をしようとするとなんか起きる、そのうちこの程度で驚くことはなくなる（本当に遅くなるときは窓を割ればすむなど考えていた）。

さてどうしたものかと思案していると、向かい側の政府の建物から背が高く落ち着いた人物が出てきた。彼は我々に「心配いらない。まあ中に入ってジュースでも飲んでくれ」と言い、建物内に案内してくれた。そしてあまり上手ではない英語で、トルハムでは一リットルの水が二〇ルピー（約四〇円）していたこと。PMSの井戸はずっと飲料水に悩まされ続けてきたこのトルハムの水問題を解決

してくれたこと。そして本当に感謝していることを何度も述べた。二〇分後、呼ばれてきた腕のいいメカニックが針金とドライバーで鍵を開けてくれた。一瞬でドアを直して当然のように帰っていくメカニックを追いかけてドライバーが数十ルピー渡していたのが印象的だった。

ダラエ・ピーチは水が豊富だ。PMSの診療所は標高二五〇〇メートル以上の場所にある。毎秒五〇立方メートルを優に超えると思われる雪解け水がごうごうと谷を流れ下っていく。標高五千メートル以上の山々から来る水は豊富である。対照的に、標高五千メートル以下のダラエ・ヌールの山には五月中に雪はなくなる。

五月の終わりには中村先生とダラエ・ピーチに行った。建設中の診療所は非常にしっかりと作りで完成後が楽しみである。道中、たくさんの水路を見ることができ大いに自信がついた。住民が自らつくったものと、NGO（非政府組織）の仕事は一目で区別がついた。一方はひび割れたコンクリートからしみ出す水とNGOの名前、他方は桑と柳がしっかりと根を張り、木陰のある水路の岸を涼しげに歩く子供たち。夜は満天の星空、中村先生から若い頃の武勇伝などたくさんお話を聞くことができた。何が何でも用水路を通す覚悟ができた。

ダラエ・ピーチから帰って数日後、ダラエ・ヌールに向かった。自分は助手席、中村先生は後部座席で横になっておられた。たとえ横になったとしても、ジャララボードからダラエ・ヌールへの道で睡眠をとることは困難だ。アスファルト舗装区間はほとんどなく、他はすべて凸凹道だからである。ドライバーは少しでも車の揺れを押さえようと普段あまり通らないシェイワ村の裏（クナル河が流れ、シェイワ水路が走っている方向とは反対の山側）を抜けてダラエ・ヌール渓谷に入る道を選んだ。そこには広大な平原がひろがっていた。思わず先生を起こして見てもらった。これからつくる用水路の終着地点の先には、ダウード政権時代に灌漑された広く（八千ヘクタール以上）肥沃な大地が存在



用水路水門は蛇籠（奥）と聖牛（手前）で制水

していた。用水路の可能性が無限に感じられた。

アフガニスタンでは、特に農村部において子供の労働力の占める割合は大きい。ダラエ・ピーチからの帰り道、朝日を背に、干し草を背負って坂道を慎重に登ってくる少女の姿は昔から変わらぬ人間の営みそのものだ。蛇籠工場の建設にきていたレイバー（現地作業員）の中には一五歳前後の少年もいる。同じ子供でも小遣い稼ぎにきているか、家族を背負ってきているかは目を見ればすぐにわかる。黙々と真剣なまなざしで働く彼らを見ると、勇気が湧いてくる。「何としても水を引くぞ」という気持ちに拍車がかかる。

現在、自分の主な仕事は用水路の取水口付近に大量に必要な蛇籠・聖牛の生産体制を整えることである。蛇籠というのはワイヤーで編んだ網を箱状にしてその中に石を詰めたものである。護岸や水の制御に用いられる。聖牛はコンクリート柱の三角錐で、蛇籠同様、主に水の制御に用いられる。どちらにも日本で昔から使われてきた技術であり、それに改良を加えて今に生かそうという試みである。

こちらでは、自分が日本で学んだ土木の知識が役に立っている。まさか水路を引く計画があるなどと、露とも知らずにアフガニスタンに入った。そんな自分にとって、もうやりたくないと思った測量を初め、鉄筋コンクリート工学や土質力学、水理学など何年か前に学んだことがそのままでは無理にしろ、今役立っていることを考えると、不思議な気持ちになる。

取水口から五キロほど離れた場所にアコモデーション（宿舍）があり、そこで蛇籠と聖牛の生産も行われる。今は生産工場の建設工事に追われる毎日である。『工場』とか『建設工事』とか聞くと、何だか大げさに聞こえるが、何のことはない煉瓦で柱を建て、竹で梁を作って、その上にすだれとわらを敷き、水でこねた泥を塗れば蛇籠工場の屋根が完成する。土を運んで平らにならし、蛇籠フレームを並べれば生産体制の完了である。

と、一口で言えてしまうが、実際の作業はシャベルと現地の人の手で全て行われるわけで、そこは日本と全く異なる。

現地のレイバーとの作業はおもしろい。焦っているこっちの気持ちなど彼らにわかるうはずはなく、こちらには真剣な態度と的確な指示が必要とされる。はっきり言ってこういう時、言葉はあまり役に立たない。絵を描いて説明したり、時には実際にやってみせることも重要である。言葉よりも毅然とした態度の方がよほど重要なのだ。徐々に形成されてゆく信頼関係。毎日が真剣勝負である。

〔ペシャワール会報〕76号（2003・7・9）より

## 米軍ヘリを尻目に 用水路建設は急ピッチで進行

米軍のヘリが頭上を飛び交うクナル川で、日々、灌漑用水路建設は着実に進められている。こんなふうに書くとは何か大げさに聞こえてしまい、不安な心境でびくびく作業をしているように受け取られかねないが、実際にはスタッフ（日本人もアフガン人も）にそんなことを気にしている余裕は全

くない、というのが現実である。この冬、最も河川水位が下がる状態で通水を行うため、重機（エクスカベーターⅡ掘削機四台、ローダー一台、ダンプロトラック七台）と、作業員六〇〇人による作業が、淡々と行われる。日本人スタッフに求められる仕事も、アフガン人スタッフへの完全なサポートに徹していた初期に比べ、積極的に牽引（けんけん）していくことが必要な場面も徐々に増えてきたように感じる。そうでなくても遅れることが当たり前このちらの事業において、クナール川の増水開始時期は待つてくれないため時間勝負になってきているからだ。

実際に用水路C地区の発破（はつぱ）作業中に米軍のヘリに発砲されたときも、中村医師を中心に近くのA地区の護岸工事について皆で真剣に検討している最中で、自分は低空で旋回するヘリの音で中村医師の声聞き取れずにいらした記憶がある。現場はそういった状況であり、攻撃用ヘリの旋回する下を米軍車輛の大行列が延々（えんえん）続く日も、輸送用ヘリとその後ろに必ずついてくる攻撃用ヘリが忙しそうに飛び交う普段の日も、水路の工事は朝六時半から淡々と進められる（この一ヶ月間はラマダン（断食月）期間だったため日本・アフガン両スタッフ、作業員全員が休憩・飲食の時間を入れずに七時間を一気に働いた）。

現在、取水口からD地区の溜め池（約二ヘクタール）までおよそ三キロメートルの区間で集中工事を展開中だ。同時に、取水口工事のためにはクナール川を一時的に堰（せ）き止め、川の水を夏の増水時期にできる支流に流す工事が必要となる。できるだけ河川水面を下げた状態をつくって、取水口（水門）工事をより容易に安全に行ないたいためだ。したがって今、取水口の四〇〇メートル上流地点には、川幅一〇〇メートル以上あるクナール川の真ん中まで堰が突き出ている。イード（祝祭）明けに工事を再開すれば一週間で築堤工事を完了できる状態である。この進行中の築堤工事と、工事によって川の水が来る対岸地区の護岸・制水工事は、すでに蛇籠（じやくこ）（Ⅱ布団籠（ふとん）九〇個）も使用してイード前に大

急ぎで完了させた。

イード直前の一週間でこの対岸工事を早急に終わらせるためには、どうしてもエクスカベータを一台対岸に送る必要があった。一日がかりでエクスカベータを対岸に送ったとき（クナル川には橋がほとんどないため、対岸を工事するためには一度橋のあるジャラバード近くまでエクスカベータで戻ってから、クナル川の左岸を再び悪路を十数キロメートル登ってこなければならぬ。おまけに対岸の道が崩れていたため、数キロ手前で河原に下り、エクスカベータで道をつくりながら現場までたどり着かねばならなかった）には、自分の読みの甘さもあり、スタッフに大変苦労をかけた。

休日の金曜にもかかわらず下見に一日つきあっていたが、土曜の当日には八時間かけて途中から道のない河原をきっちり誘導していただいた清宮さん。現場での仕事を終えた後（午後三時）、途中でのエクスカベータ故障を考えて（見事にはずれた）車で対岸に向かう自分を冷静にサポートし、的確な指示でジャラバードに到着する八時半まで一緒に探しにいらした橋本さん。結果的にはエクスカベータも送ることができ、皆無事であったため言うことなしだ。

しかし、冷静に場所と情勢を考えると、自分ひとりでは何一つできないことも事実である。この日はいつものことながら特別に、頼もしい先輩二人と仕事ができる現在の自分の境遇に感謝した。また、普段の忙しさにラマダン期間中という厳しい条件も重なったこの一ヶ月間、エクスカベータのオペレータとして助っ人に駆けつけてくれた石橋さんには、清宮さんも自分もずいぶん勇気づけられた。こうした信頼できる日本人スタッフチームの強固な連携なしには、水路事業という困難なプロジェクトを進めていくこと自体まず不可能である。時には冗談や親父ギャグで疲れた心身をリラックスし、仕事の時はきっちり自分の役割を果たしていく、カナル（灌漑用水路）の現場はそんなところだ。

## 増水期を目前に控え、 取水口建設は総力戦

この三ヶ月間は、まさに怒濤のように過ぎ去った。総力戦と呼ぶにふさわしく、人員も重機も資材も使えるものはすべて投入しての三ヶ月だった。

実際、中村医師、橋本さん、清宮さん、石橋さん、鈴木祐治さん、伊藤さん、小宮君、そして自分が水路に日本人常駐スタッフだけで八人という異例の体制が敷かれた。現場に日本人を増やし、各自が直接中村医師の指示にしたがって迅速に各地区を完成させていかなければならない。それほど時間は切迫しており、雨季の到来は迫っていた。

雨の中の作業では、危険度が急上昇するのは反比例して作業が全くはかどらないことは、これまでの経験から痛いほど身にしてみていた。アフガニスタンにおいて不届きとも思えたが、毎晩明日の晴天を祈って眠った。そして最も重要なことは、クナール川の水位は徐々に増加の兆しきざしを見せており、「取水口と水門」、「斜め堰かき」、「取水口の対岸の護岸」の三つの工事は絶対に増水開始前のこの時期を逃すわけにはいかないということだった。水位の上昇はこの三つの工事を不可能にし、これは最悪の場合、大量の水が水路内に流入し水路が崩壊することや、冬季の取水ができない水路になることや、斜め堰の影響で夏季に対岸が削られクナール河の流れが変わる等の、水路にとって致命的ともいえる欠陥を残すことを意味した。もちろん、最低水位時における通水を目標としているからには、D地区までの全区間一ヶ所でもとりこぼしがあつてはならない。

文字どおり背水の陣が敷かれ、中村医師が「やるか、やられるか」と表現された水との闘いが各地



福岡県を流れる筑後川の山田堰（左上）を参考に造成した取水口

区、各ポイントで並列的に進められた。アフガン東部、人家もほとんどなく夜はかなり危険な場所だとされるクナル州とニングラハル州の境ジェリババには、三ヶ月間休みなく日本人が働きつづけ、日本人の執念が充満していたと思われる。

「冬の最低水位においても取水可能な水路を」という中村医師の思いは現実のものとなった。先生と見にいった筑後川の山田堰。そこからヒントを得たというすばらしい斜め堰ができた。

長さ一〇メートル以上もあるこの斜め堰の完成は、中村先生、石橋さん、鈴木祐治くんの大奮闘なくして成し得るものではなかった。対岸の護岸はこれも鈴木祐治君が大変な悪条件のなか、粘り強くやり遂げてくれた。最も難関と言われ最大深部八メートルを超す岩山開削部分を最も早く、丈夫な水路に仕上げた清宮さん。伊藤さんと小宮君の活躍によりD地区の溜め池にすばらしい堤ができた。オフィス、農業、井戸そしてこの水路と、全てを一手に引き受けた大黒柱・橋本さんの働きには本当に頭が下がった。まさに大車輪の活躍で

重機のアレンジ、植樹の指導をしつつA地区を仕上げ、見事な大工仕事で鉄筋コンクリートの水門の型枠をあつという間に作っていた。現地の大工には、間違ひなくお手上げのこの迅速かつ完璧な仕事のおかげで、水門のコンクリート打ちを最短で終わらせることができた。こうして、斜め堰を先に延ばして川の水位が上昇しても、水門で水の進入を止める準備ができ、水門と斜め堰の「心中」は回避された。水門のコンクリート打ち（鉄筋配置後、型枠を設置、その後コンクリートを流し込む）は水がない状態でないと無理、これを終えない限り斜め堰を延ばすことは不可能だったからだ。

自分はといえば、「強固な取水口さえできれば何とかなる」という一念に頑としてこだわり、この三ヶ月間朝から晩まで取水口でレイバー（作業員）と悪戦苦闘していた。大量の蛇籠（ヒラミッド）を組み上げ、部厚い鉄筋コンクリート構造と一体化させた。クナル上流側から見ると要塞のように見え、「またへりに攻撃されるんじゃないか」と先生は笑っていた。蛇籠プロジェクトは万全の結果を出し、聖牛（せいぎゅう）プロジェクトのメンバーは現場で蛇籠の組み立てから鉄筋の折り曲げ、配置、コンクリート打ちまでこなし、彼らを夏から地道に育ててきた成果は期待を上回るものだった。

取水口で使用した蛇籠（布団籠・二×一メートル）だけで一一〇〇個、使用鉄筋総重量が一二トン、打たれたコンクリートは四七〇立方メートル。水路全体でこれまでに使用した蛇籠の体積は七千立方メートルを超える。これは、一枚ずつレイバーによって丈夫に編み上げられた蛇籠、その亜鉛メッキ鉄線だけで八〇トン以上になり、岩山を砕いて運び、蛇籠内に一つずつ積み上げた石の総重量は一万三千トンを超えたことを意味する。約一万个の土囊（どぶくろ）や、大量の柳の植樹も含め、この水路がいかに手作りの水路で、多くの人の手によって一つ一つ地道に積み上げられてきたのかを改めて感じる。中村医師自ら行った苦心の測量の成果がよどみなく流れる美しい水路を作った。突貫工事だったため、一部で水が抜けるというアクシデントはあったにせよ、夏の増水期に向けて改修工事を早めに行

なえることを考えると、むしろ良かったと思われる。

多くの人達の協力を得て通水は成功。今後も、植樹、土囊の設置、取水口付近とC地区の護岸強化など、水路をより頑丈なものにしていくための作業は継続していかねばならない。そしてD地区以後の区間の工事も再開される。

山の雪が非常に少ない今年（〇四年）、早魃かんぼつの不安が胸を過るよぎ。現在通水を完了しているD地区から、さらに三キロ先まで水路を延ばしたい。できる限り早く。ここまで水を通せれば多くの田畑に水を配ることが可能になる。今年の夏を目標に何とか実際に水を運んでいきたい。多くの日本の良心が現実の形となって、命の水が乾いた大地を潤すために。

〈『ベシヤワール会報』79号（2004・4・14）より〉

## 最重要区間の試験通水に成功しました

三月四日金曜、午前一〇時。すでに現地の日差しには夏の兆きざししを強烈に感じる。D地区溜め池たの排水門を閉めるため腰まで水に浸かったとき、足がちぎれるほど冷たい雪解け水に昨年（〇四年）の取水口工事を思い出した。あれからちょうど一年、今日は取水口ではなく、約二キロメートル下流の溜め池三連水門の堰板せきがはずされた。取水口から二〜五キロメートル区間、未だクナール川の水が到達していないスランプールの崖に沿って水を通し、崖以降に広がるクス・クナール一帯の灌漑かんがいを可能にする最重要区間の試験通水だ。

前夜から少しづつ溜められていた池の水が下流に向けてどっと溢れ出す。水の流れにあわせてスタ



第一次通水を喜ぶ中村と現地の子供達

ツフ、子供からお年寄り、野次馬を含め皆で移動するが、自分が直接担当した構造物に水が来たときは漏水などの不備がないかどきどきする。水道橋、二ヶ所の道路横断部暗渠、雨水排水用の暗渠、崖の終着点にあり水路の水を下流のブディアライ村に向けて配水する小水路のための分水門と連続する暗渠部など、水が無事に流れ一安心、やはりうれしい。一年の苦労も文字どおり水に流されてゆく。

中村医師曰く、流速・流量とも予想以上の結果で、分水門から下流への配水もうまくいくことが確認され、今後もブディアライに向けて分水路の拡張工事が継続される。分水門から約一キロメートル下流にシエイワ郡一帯を潤す既存のシエイワ水路の取水口がある。このシエイワ水路の取水口よりPMS（ベシャワール会医療サービス）の水路が二〇メートルも高い地点を流れていることを考えると、この水路の灌漑能力の大きさに改めて驚かされる。

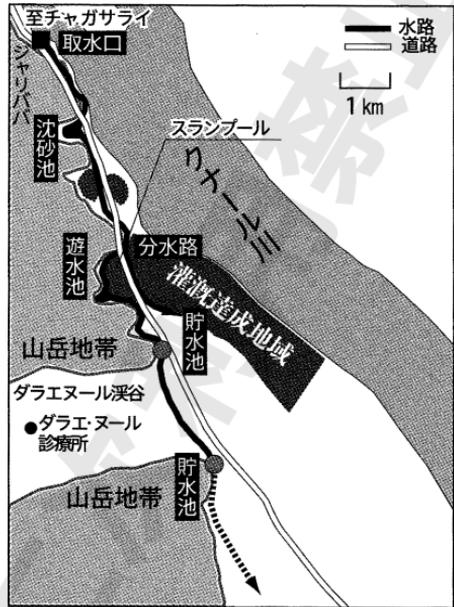
予想通り、予定通り、F・Gの埋め立て区間で

は数ヶ所大きな漏水部が確認され翌日から大掛かりな補強工事が開始された。昨年も埋め立て区間で  
の漏水工事を経験しているため抜本的な改修工事が一番の近道ということはわかっている。現場責任  
者のヌールザマンを中心として現在皆この埋め立て区間の補強工事に全力を注いでいる。土と石と木  
で成るこの水路は生き物で、時間をかけて少しずつ成長していくものだということを我々は学んだ。  
根気よく手入れをすれば丈夫ですばらしい水路になることも知っている。

思い起こせば二〇〇三年の三月一〇日、ジャララバードに到着してから、水路での二度の夏と、二  
度のラマダン（断食月）と、二度の冬の陣を何とか乗り切ったことは僕の大きな自信となった。来て  
すぐに水路計画が開始され、測量からはじまり、蛇籠・聖牛の生産、水路現場での作業、取水口工事、  
対岸の護岸工事、コンクリート構造物の建設など、水路に関する多くの仕事に携わることとなった。  
人も物も時間も十分でない条件の中、何とかスランプールの崖を水が廻ってくることを夢見て、ない  
力と知恵を絞る毎日だった。それでも多くのひとの力によって、いま目に見える結果にたどり着いた  
ことは、幸運ではあるかもしれないが必然であったと思う。

この世界において、人は何かできるのか、という当初抱えていた疑問は少しずつ消えていった。実  
際に何もない場所に沢山の家が建つのを目にし、数え切れない人々が戻ってきて、毎日彼らと一緒に  
働いていれば当然かもしれない（水路の水が来るであろう地域は今も家屋の建設ラッシュが続いてお  
り、PMSの水路現場では毎日七〇〇人以上の地元住民が働く）。そして現実に高い崖を越えて涸れ  
ることのない水が来る。

中村医師自身が砂埃をかぶり、冷たい水に浸かりながら現場で作業する姿は、国籍や宗教を超えて  
人の心に強烈に響く。その姿勢は日本人スタッフ、現地スタッフ、現地の作業員、地域の人々へと理  
解され広がっていく。この場所での人達は本気でやっているんだ、と。そして二年間の結果、この



灌漑用水路要図  
(2006年7月現在)

夏現地の人々に実際に水が送れることは何より大きい。去年立ち枯れた小麦が今年は青々と生長するだろう。去年田畑を覆い尽くしたケシの花は、今年影も形もない。

ここは口で、論理で説明しただけで人々が動くほど生易しい場所ではない。結果を出さなければ人々は信用してくれない。言葉ではなくその人の行動を、その結果を信じるのである。逆に言えば正しい結果を見れば人々は協力を惜しまない。自分がこの二年間、水路の現場で経

験し学んだ事実だ。水路の水が現実に人々のものとして活用され始めた今、この水路事業に現地の良い力がある。力がはたらき、どんどん良い方向に向かって突き進んでいくことを僕は強く感じている。

日本でPMSを支え下さっている方、常にサポートしてくださった中村先生、藤田さん、橋本さんをはじめとする日本人スタッフの方、ヌールザマンを中心とする現地スタッフ達、僕を勇気づけ、笑わせ、そして多くの感動をくれ、毎日一緒に力を合わせてくれた現地のレイバー（作業員）達にこそから感謝しています。この素晴らしい二年間をほんとうにありがとうございました。

『ペシャワール会報』83号（2005・4・18）より

## 灌漑用水路

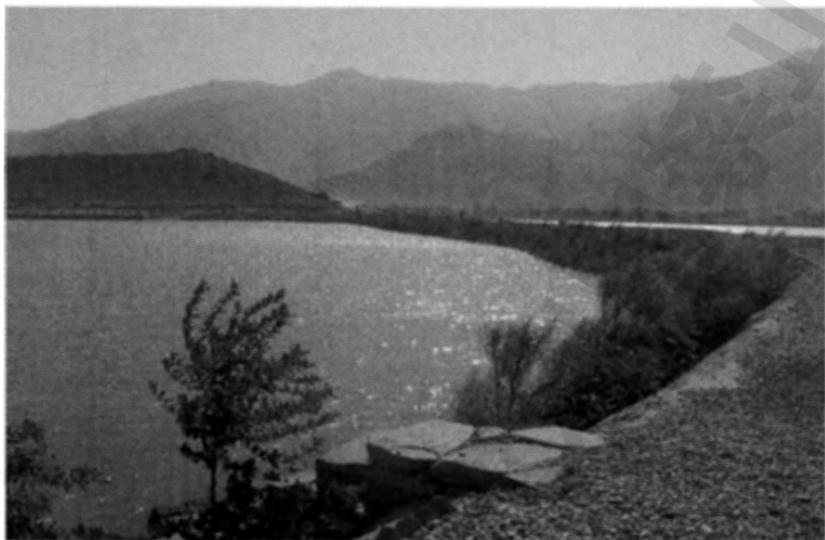
宮路正仁

農業計画／灌漑用水路建設担当・2002～2005

### 到着三日目でアメーバ赤痢に罹<sup>か</sup>ってしまいました

現地に来て早くも半年が経ちました。三週間の日本での休暇の後帰ってきたアフガニスタンは、あつと言ふ間に暑くなっていました。六月中旬現在の気温は、外気で五〇度を超し、室内で四〇度ちよつとぐらゐ。空気が乾燥しており、外でしばらく仕事をしていると舌が乾燥してきます。しかし、湿度がないためあまり暑くは感じません。

今回、中村先生が水路に力を入れることになり、私の仕事も農業のアシスタントから水路の測量チームの方へ移動となりました。この測量チームは、現在PMS（ペシヤワール会医療サービス）の現地技師が二人で、自分を入れても三人しかいません。二人がスタッフという物差し型の棒を持って立ち、中央の一人が器械でその高低差を読み取るという仕事から、少なくとも三人、記録係も入れると四人は欲しいところ。足りないところは地元の人を雇ってやっていきたいと思います。



灌漑用水路の途中地点に造成した広大な沈砂池

測量の仕事は川辺の崖から野原の真中まで様々な場所が歩けるので、散歩にはもってこいですがさすがに仕事の時間は暑い時は避けていて、早朝から午前中、あと夕方など涼しい時間帯に集中してやっています。

現地に着いてすぐ、三日という本当に短い期間の間に、二度目のアメーバー赤痢にかかってしまいました。仲地医師が言うには、結構多く体内に入らないと発症しないらしいので、何か悪いものでも食べたのではないのでしょうか。普段はよく食べる現地食もさすがにこのときばかりは体が受け付けませんでした。

こちらの食事は、ご飯は油で炒め、スープにはギイと呼ばれる羊の油がこつてりと入っており、他の料理もオクラの炒め物など、とにかく油をよく使うのです。こういう時、日本の事務所から送られてくる食料が我々の生命線となります。味噌汁はうまいですね、やつぱり。他のワーカーの方々の優しさも身にしみます。

今回は、ダラエ・ヌールのPMS診療所でドク

ターに診てもらい、ジャララバードの他の病院で再度検査を受けさせてもらいました。食事の前にはちゃんと石鹸で手を洗うように言われ、そりゃそうだと思いながらもしっかりやってなかったことに気がきました。今はもう病気も治り、元気に現場を駆け回っています。

ダラエ・ヌールを語るにあたり、夜ははずせません。各エンジニア達がオフィス内での作業・ミーティングを終え、測量チームも計算を済ませてしまいます。夜一一時近く発電機のけたたましい音が静まり電気が消えた時、街灯の明かりもないこの村では晴れていれば夜空の方が明るくなります。ダラエ・ヌールの星はまた格別です。

夏の夜はみんなベッドを外に出して蚊帳かやを一つずつ張って寝ます。聞こえてくるのは、虫の音、犬の鳴き声、隣の人のいびき。星が見たかったので慌てて首を引っ込みました。マラリアの蚊ならマラリア、他の蚊でも何か病気を持っている可能性があるのです、クリニックのメディカルチームはみんな蚊帳を使っています。しかし、水事業の人はあまり気にしないらしく、使わない人もいます。流れ星を待つていたら、蚊帳の中からも見える元気のいい流れ星が見えたので嬉しかったです。

〔ペシャワール会報〕76号(2003・7・9)より

## アフガン人の握手に感じた威厳と懐かしさ

今、私はクナール河流域のスランプールという半沙漠地帯の真つ只中ただで毎日二〇〇人もアフガン人、スタン人と朝夕二回握手を交わしている。現在進行中の水路プロジェクトで、約一四キロメートルに及ぶ水の通り道を手掘りで掘り続ける現地レイバー（労働者）に一人ずつ日当を手渡すためである。そんな中、私はこの「手」というものが醸かまし出す言葉とはまた別のメッセージを、新鮮な驚きと不思議な懐かしさと共に密かに味わっている。

「戦争、早魃かんばつ等々災難はいろいろあつたし、これからもあるだろうが、私はこれまで通り、自分がしてきたことを続けていくだけさ」

幾重にも重なり合った皺しわが、ちょうど彼の背後に連なる岩山の肌のように長い年月を経て刻み込まれてきた手は、そう語りかけてくるように思えた。その手には、この国が辿ってきた激動の過去とは遠い場所で地に足着けて生きてきたことを象徴するかのような無骨さと抱擁感があつた。またこの懐

かしさは、幼い頃何度も私を包んでくれた祖父のものを即座に私に思い起こさせた。

また、ある手を握ろうとしたとき、自分の指の何本かが手に余った。見ると彼の人差し指と中指しか握れていなかった。……一体どうやって仕事したんだろう？ という疑問はさておき、これも一つの完全な手の容すがたなのだと思わされるほどの威風堂々とした、儀式とも呼べるほどの紳士的な握手だった。

またある手を握ろうとすると、触った瞬間すぐに引つ込められた。見ると彼の掌てのひらが赤く斑点模様になっている。このような手は他にも数名見られたが、意識的にすぐに逸そらしたのは彼だけだった。

またある手を握るとパキポキと小気味良い音がし、こちらの手も逆に鳴らし返そうとしてくる。ちなみにこちらの人は挨拶時、手に限らず相手の体の骨の音を鳴らすのが非常に上手い。一度慣れると癖になる習慣である。私はまだ鳴らされることしかできない。

そしてこれが私の最も印象に残っている握手なのだが、普通、握手と同時に給与である一〇〇アフガニー紙幣を渡すのだが、ある年長者は受け取りの際、これを足元に落としてしまったのを気にもとめず、しばし私の手を握り続けていた。

断るまでもないが、これらの握手から私が抱いたイメージは全く自分の勝手な想像であり、この先、印象は全く違ったものになるかもしれない。また、日毎に怒涛のように増える彼らに、こうして逐一手渡していくのも難しくなると思われる。だが、この場でこんなに沢山の「生の手」に確かに触れたことは、生涯私の身体の記憶として残るであろう。

〈『ベシヤワール会報』76号（2003・7・9）より〉

## 井戸と用水路建設の裏方で奮闘中です

いかががお過ごしでしょうか。勤務開始以来七ヶ月、ジャララバード事務所のオフィス・セクションに配属され仕事をしています。

水源確保、用水路建設、農業計画はいまや正規スタッフ約一五〇人、日雇いの作業員約八〇〇人を抱える大所帯となっていますが、オフィス・セクションはこれらの人達が現場で働くのを裏方で支える縁の下の力持ち的存在です。具体的には、機械・車輛・道具などの一切の必要資機材をアレンジしたり、各役所への許可申請・折衝などを行ったり、スタッフの採用・昇給など人事を管理したりと、現場で働くスタッフが最大の成果をあげられるように雑務全般をこなしているといえます。私もそうしたオフィスの性格を受けて、その時々に必要な様々な仕事に携わっています。

これらの仕事の多くはそれ自体日本人でなくともできるものですが、最近日本人である自分が彼らとともに仕事をするこの意義があるのだと実感することができるようになりました。



用水路建設に奮闘した日本人青年ワーカー

(左から鈴木祐治、川口、鈴木学、清宮、橋本、伊藤、小宮秀章、大越、宮路)

それはPMS（ペシャワール会医療サービス）を物心両面から支えてくださっている会員の方々の想いを少しでも代弁することです。

こんなことがありました。活動の様子を記録に収め、日本側へ伝えることも私の仕事の一つですが、ある日用水路の掘削の様子を映像に収めるために、工事現場を訪れたところ、五、六人のスタッフが集まっていました。私が来訪の目的を伝えたところ、彼らは笑い出し「何だ、撮影にきたのか。そんなのは遊びに来たようなもんだな。俺達は大変な仕事をしているのに、君は呑気なもんだなあ」というのです。私は、一瞬耳を疑いましたが、気をとり直して言いました。「君達は自分達が全て独力で仕事をしていると思いきや、こんなにいるように、これらの工事費用や君達の給料を負担しているのが誰なのか考えたことがあるのかい。これらのお金は全て、日本のドナー（寄付者）が苦勞して自分で稼いだお金から善意で削って出してくれたものなんだ。そうした人々の厚意に応え、工事の

進捗状況を報告する仕事が本当に遊びだと思ukai。彼らは、ハツとした様子を見せ、すぐに謝ってくれ、それからとはとても協力的になってくれました。

また、こんなこともありました。ペシャワールの病院と連絡を取り、必要なアレンジをするのも私の仕事です。必要に応じて現地スタッフの人にも話をしてもらうのですが、通話料が非常に高く、要領良く話さなくてはなりません。そのことをある現地スタッフに頼むと、彼は「大丈夫、高くて僕や君のポケットから出ているわけじゃないから気にすることなんか無いよ」と笑い飛ばす始末。そんなときにも、恥ずかしながら私の説教が始まってしまいます。

もちろん、彼らに悪気があるうはずがありませんが、こんなやりとりがときどき交わされます。日本へ行ったことのない彼らの中には、PMSの運営資金が、アフガンの困った人たちの役に立ちたいという、多くのドナーの善意の結晶であることに思いが至らず、どこからか無尽蔵に湧き出て来るかのように思い、それがときにコスト意識の低下や、仕事ぶりに影響することもあるようです。そんなときには私も日本人ワーカーの一人として、言うべきことはつきり言うように心がけています。

現地のスタッフと共に仕事をし、ドナーの皆さんの想いを伝えていくことで、提供して下さったお金が実際に少しでも多くの成果となり、アフガンの困った人々に恵みとして届くようにすることも大切な仕事だと考える今日この頃です。

〈『ペシャワール会報』78号(2003・12・17)より〉

灌漑用水路

石橋忠明

土木技術者・2003

## 困難を友とし、ユーモアを糧<sup>かて</sup>として工事完遂

「オポ・ラジャー！（水が来る！）」

裸足の子供達がこちらに駆け寄りまとわり付く。「セイーダ・オポ・ラジャー！」。手を挙げて応える。足下を見る。水路ではスタッフが心の何ものかを抑えるように流れ来る水の半歩先を歩く。一歩ずつ、ゆっくり、ゆっくり、と。そう、水が通ったのだ。今までの様々のモヤモヤ、シガラミが一挙に晴れた。水が元気と勇気をくれた。やっと一〇万人の命を救う水路に水が通ったのだ。

ユニポのオベ（操縦技術者）としてペシャワールに飛んだのは去年（〇三年）の一〇月。それから数ヶ月、様々あった。小生と共に到着したユニポは中古とはいえ電気系統、タイヤ等が故障。工場は発電器に頼り道具は不充分。アフガン人の仕事の荒つばさに加えて、言葉と習慣の壁。もう困難を友としてやり抜くしかない、と腹を決めた。とはいえ四千メートル級の山々と眼前に広がる砂漠、そこに点在する泥の家、ロバ、ラクダ、山羊、羊の群、子供や老人の明るい笑顔……珍しさも手伝ってか



スタッフハウスに集った日本人ワーカー  
(左端が石橋氏)

堪らない魅力もこの地は放つていた。

早朝ユニボで現地に赴く。子供達がこちらを向いて手を振る。足の悪い男が頭を下げる。ラクダがユニボと競争する。羊が横切る。昔沃野であった砂漠土漠がずっと続く。よく見ると向うにクナル川が見える。我々の水路は、この川から砂(土) 漠へ水を引き耕地化を可能にして一〇万難民の帰還帰農を促そう、というものだ。ヒンドウークシユ、スレイマン、……山々の雪が解け雨季と重なって川が増水する前に取水部の水門・堰を完成せねばならない。間に合わないとい工事は来年の冬まで待たねばならない。事は一〇万人の命に係わる大事である。即ち自然と人との「時」をかけた死斗たしかという訳である。

「斗い」の中にも笑いは絶えない。現地スタッフ、レイバ1(現地作業員)、日本人スタッフ、ドライバー皆握手し抱擁し合う。生を確かめ合うように。パシウトウ語、英語、ファルシー語(アフガンのペルシャ語)が飛び交う中、我々日本人は「落語」で話し合う。活力を得るために。

落語的日常の中で、しかし「時」は待ってくれない。暖冬のせいか、日中は真夏のような陽差しが身を射る。水門と水位を上げるための堰作りを急がねばならない。現地特有のスローペースと折り合いをつけつつ。とにかく今冬は「取水部」が優先課題である。もう時間切れ、とばかりに堰を流れに直角に作り出す。水流調節のため、パイプ・聖牛せいぎゅうを埋めつつ進む。が、対岸に近づくにつれ川幅が狭

まり洗濯も起きて激流となる。なかなか進まなくなる。中村医師が泥まみれ水浸しになりつつ最先端でパイプを埋め込む。レイバーが心配して代わりになって泥々になる。もう皆一体である。真冬のクナールである。落ちたらひとたまりも無い。水の冷たさは身を切る。ジッカ！（上げる）、タオカ！（曲げる）、叫びつつ、命懸けの作業が続く。

だが、皆で体を張って延ばした堰も結局激流に阻まれて中止。急遽日本古来の斜め堰に方針を変え、激流を作らずに進むことにする。自然相手の仕事である。臨機応変、朝令暮改は日常茶飯事である。苦勞して埋めた土石を笑いながら掘り返し斜めの方向へと埋め直す。途中蛇籠で円形の補強物を作りつつ、右背面に巨石を入れて支えながら進む。ダンプの誘導も一仕事である。「時」の遅れは巨石ハッターがローダーを以て穴埋めしてくれた。バケツトより大きい数トンの巨石を先端と背面に次々と放り込む。一挙に水位と長さをかせぐ。正に一石二「長」である。水位が上がり、盛り土を超えて工事中の水門に入る。水門作りの担当者から睨まれる。しかし水門作りもザルザル（急いで）やらざるを得なくなる。全く巨石様々である。

山々の雪は申し訳程度にはりついている。川中の見え隠れしていた石が視界から消える。自然は雪解けを告げていた。水門も堰も、しかし完成していた。間に合ったのだ。

今こうして水路の静かな流れをみていると、様々な絵が脳裡を去来する。荒つぽいがメシ、チャイをいつも誘ってくれたレイバーたち、今の日本では稀有ともいえる明るい、やさしいスタッフ、……そして、どうしようも無く貧しいのに必死に明るく生きている子供達。また来ようと思う。彼らに会うために。そして、この水路が、荒漠たる人類現代史に真珠の如き光を放つことを願って。

道がある。水の道である。命の道である。

無償の支援……。人の道である。

『ベシヤワール会報』79号（2004・4・14）より

## 重機購入の特命帯びカラチへ

今回、私は灌漑用水路工事に必要な重機購入のため、二度、計一ヶ月ほどパキスタンの南に位置する大都市、カラチに行つて来ました。

私達の病院があるペシャワールからカラチまで、バスで約二五時間。トイレ休憩、食事休憩、お祈り休憩が道中何度かありますが、一度だけ食事休憩の無いバスに出会つてしまい、一日中何も食べられなかったことがあります。

カラチには大きな港があり、日本や中国等、外国から色々なものが入ってくるそうです。私達が探し求めているものはユニボ（油圧シヨベル）、ジャックハンマー（削岩機）にホイールローダ（大型シヨベル）の三種類で、日本からシンガポールを経由してカラチにたどり着きます。

生まれて初めてのカラチ旅行で、初めての重機購入です。初めはどうなることかと心配しましたが、どうにかなるものです。何よりも今回の旅は本当に幸運が付きまといました。



中村自ら重機を操り工事の陣頭に立った

一番の幸運は私達が本当に人のいいお店と出会うことができたということです。普通パキスタンで重機を購入するには理不尽なことが多いのです。

今回、重機購入のため、私と一緒にカラチに行ったアブデュル・ハミッドさんが以前訪ねたことのあるお店ではまず、自分の欲しい重機をお店側に伝え、写真を見せてもらいます。写真を見て気に入れば前金を払います。実際に重機が港から届いたときに初めて実物を見ることができず。

この時点で残りのお金を払うのか、払わないのかを決めなければなりません。もちろん試運転なんでものはさせてもらえません。お店に着いた時点で目的の重機がまったく使えないもので、これは要らないと言っても、前金は返してもらえません。一か八かの買物です。

それが、私達がカラチで出会ったお店は交渉の末、前金は要らない、試運転も気が済むまでしてよい、と言ってくれましたし、値段に関しても相場だろうと思われる価格を提示してくれました。カラチで訪ねた他のお店ではなかなか状態の良いものは見つからないし、見つかったも値段を相場より相当高く見積もられたり、散々でした。

それが、このお店では近く日本からホイールローダが新しく届くから、それを私達のために用意しようとまで言ってくれたのです。カラチに着いて二日目のことでした。

しかし、それから長かった。約束の日に再度同じお店に行ったのですが、「明日来る」と言われ、次の日に再度訪ねると、

「二日後に来る」と言われました。それから毎日そのお店には顔を出しました。

「二日後に来る」と言われてから当日、彼らの返事はこうでした。

「あれならもう売れた」

このお店は自前のホームページを持っているのですが、そこに載っている写真だけを見て購入した人がいたそうです。バキスタンでは実物を見ずに重機を購入するのが普通なのだそうです。椅子に座りながら「そうか売れたのかあ」と落ち込んでいると、この店の主人が「そういえば」という感じで、「新しくユニボが届いたけど買うか」と一言。昨日もその前の日もユニボについては何にも言っていなかったのにも思いつつ、私達はホイールローダのことなど忘れて、すぐに試運転、エンジンのチェックをし、ペシヤワールの病院に連絡を入れました。エンジンの状態は良く、オイル漏れもなく、これといった故障箇所も見つからず、アプデュル・ハミッドさんも今まで見てきた中で一番良い、と評価しました。今回の買い物で何よりも一番欲しかった物が手に入った瞬間です。

二つ目の幸運はこのユニボです。ユニボを購入しエンジンオイルなどを入れ替えている作業中、見慣れない人が私達の近くに寄ってきて話し掛けてきました。

「このユニボを私に譲ってもらえないか」

この人は以前、ユニボを紹介して欲しい、とこのお店に問い合わせたところ、満足のいく写真を受け取り、そのユニボを購入するため、七ラック（七〇万ルピー）もの大金を前金としてお店に支払っていたそうなのです。しかし、お金を払った後にしばらくお店の方に連絡をしなかったため、いざカラチに来てみると、すでに目的のユニボは他の人が全額払って、買ってしまっていたと言うのです。彼はその事実をお店の主から聞いた後、どうにかならないかと相談したそうです。主曰く「譲ってもらえないかどうか、自分で直接聞いてみる」



一日の作業を終え、家路を急ぐ用水路の現地レイバー達

そして、彼はしぶしぶ私達の所に来たのでした。そう、私達が購入したウンボこそ、彼が前金セラックも払ったウンボだったのです。もちろん私達が譲るわけはありません。

彼はおとなしく帰っていききました。あと数日、私達がこのウンボと出会うのが遅れていたら、きっとこの人のもになっていたのでしよう。

また、ジャックハンマーやホイールローダに関しても、お店の人から数日後に届くという情報を聞き、無事購入することができました。今では立派に灌漑用水路工事にて、お役目をはたしていると聞いています。生まれて初めて、いい買い物をしたんじゃないかなろうかと、思っています。

〈『ベシヤワール会報』79号（2004・4・14）より〉

## 小さい子までが皆、 水が来るのを待っています

暑い。現在私は、水路事業の一員としてカナル（灌漑用水路）の現場で働いていますが、朝七時を過ぎると暑さが本格化してくるようになります。ただ、最初はうわー暑いなと思っていたのも、最近は今日も暑いなーと漠然と感じるだけ。温度計もないので、周りの人が今日は四〇度、五〇度だったといつてもいいまいち実感がありません。そのような中カナルの現場で仕事が進められているのですが、皆様もご存知の通りD地区（沈砂池）までの通水が無事終わり、現在はD地区以降Q地区まで通水（Q地区まで通水すれば農地に灌漑可能）を目標とし、中村医師を初め、先輩ワーカーである鈴木学さん、日本から再び来られた石橋さん、新たに来られた鬼木さん、進藤さん、現地職員、現地レイバ―（作業員）と共に仕事をしています。

現在の灌漑用水路の進行状況は、D、E地区の掘削、P、Q地区のファイリング（埋立て）、そして



建設中の用水路で水浴びする子供達

自分が今取得を目標としているコンクリート建造物の作成が主な仕事になっています。

E地区の掘削は現在レイバーによる手掘りでやっていますが、D地区の掘削、P、Qのフィリングに関しては冬の上の重機を投入（合計ダンプ二八台、エクスカベーター八台、ローダー五百台、急ピッチで作業が進められています。その理由として八月の自衛隊派遣（実際はどうかわかりませんが）、九月の選挙があるからです。中村先生がおっしゃるには政治情勢は急激に変化するとのことです。ですから九月に情勢変化が起る可能性が高いのではということがあり、急ぐ必要があるのです。

九月までに何とかQ地区までの通水を可能にするために、自分自身ができることを全力でやっていきたいと思っています。

実際現場で仕事をしていて感じるのですが、地元住民の、用水路に対する期待が非常に大きいことを感じます。地元住民の多くはレイバーとして働きに来ているのですが、ここにはいつ水が来るんだと毎日のように聞かれた時期もあり、また測量するときレベル（水準点）をペンキでマークをつけていくのですが、マークを踏みそうな子供に「このマークが消ええると水が来ないぞ」と言うのと慌てて足を引っ込めたりと、小さい子まで水が来るのを待っているんだなと思います。

現在このような環境で自分が仕事をできるのも皆様のご厚意のおかげです。この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。

〔ペシャワール会報〕80号（2004・7・7）より

## 素人技術者の挑戦

アフガニスタンにきた六月初旬、すでに酷暑の最中であつた。

用水路現場に着くと、もうもうと砂埃が舞っている中を、ダンプカーや各種重機が行き交い、この初対面の光景に圧倒されてしまった。想像以上の規模で進められている用水路工事の現状に、私に何かできる仕事があるのだろうか？ イメージしていたボランティアによる用水路建設というより、一大プロジェクトによる公共工事の観を呈している。不安は募るばかりであつた。

まずは道路拡張の埋立工事に配属され、ダンプカーの誘導が仕事の手始めとなつた。容赦なく照りつける炎熱の下で、ダンプカーが吐き出す土石から立ち昇る物凄い土埃の洗礼を浴びつつ、全身埃まみれの日々が続く。かつての不安も何処へやら、すっかり「埃高き男」となつてしまった。

それにしても暑い！ 昼前には五〇度まで目盛りが付いた温度計も最上部に達してしまふ。いったい何度になっているのだろう。脳ミソが沸騰しそうだ、肌はミイラ化し、常に全身が水分の補給を要

求めている。

この乾き切った砂漠地帯で動物も植物も人も、万物が生活していく上で、水が命の根源であること  
を痛切に実感する。と同時に我々の取り組みんでいる用水路建設が、重要な鍵を握っていることも認識  
させられた時期でもあった。

用水路の進捗状況は、すでに取水口より約二キロメートル、沈砂池までが通水可能である。それか  
らさらに四・八キロメートルまで工事の先端は伸びていて、さらにその奥の砂漠地帯に触手が伸びつ  
つある。その間に私達日本人ワーカー五名が、同時進行で八区間を分割担当している。

涸れ川を渡る水道橋と道路を横切る埋没地下用水路が二ヶ所。膨大な埋立量が必要とする、岩稜基  
部の裾巻工事。強固な岩盤掘削もダイナマイト使用の発破作業により、幾多の難所も最早峠を越えて  
いる。あと二ヶ月の工期で、取水口より四・三キロメートルまで通水できる予定である。

現在私が担当している場所は、我々の区分図ではD地区と呼ばれている所で、沈砂池の横の水門作  
りに専念している。ここはクナル河より導水する取水口を経て、一旦大きな池に水を溜め、泥を沈  
澱させて綺麗な上水を用水路に送り込む、また水量を調節するための排水口と一体となった、本格的  
な水門の建造である。

担当を始めた七月初旬、上流のカラコルム山塊の雪解け水でクナル河が増水し、池の水位も一日  
二〇センチ位の上昇が続いた。大変である！ あと二週間もすれば、溢れた池の水で道路の決壊を招  
く最悪の事態が予測された。中村医師の号令一下、急遽排水門の突貫工事を開始、連日の残業と休日  
出勤のお陰で、仮工事の水門ができた。道路決壊は免れたが、その代償として、次々と日本人  
ワーカーの体の方が壊れて、入院者続出の犠牲を払わねばならなかった。

完成した排水門は仮工事とは云え、私の「力作」のレンガのアーチ橋は見事な出来栄であったと



苦心の末完成した、用水路の三連水門  
(左が鬼木、右は藤田)

自画自賛しておこう。これが過去形の表現なのは、ヒンズークツシユ山脈からの雪解け水による増水も落ち着き、ぐっと水位が減った八月中旬に、本格工事に着手するため、水門全ての取り壊しになったからである。最後に残ったレンガ部分のアーチ橋は、さながら凱旋門の如く威風堂々と突っ立っていたのが、非常に印象的であった。

さら地となった場所を掘削し、湧き出る水とのせめぎ合いも、次第に落ち着いてきた九月初旬、本格工事の基礎の鉄筋組みと厚さ一メートル以上のコンクリート打ち工事へと移行した。

完成の青写真は、我が郷土が誇る福岡県浮羽町の三連水車に因んだ訳ではないが、用水路に導水する三連水門と、それに隣接する排水門で、四連水門の圧巻が現れるはずである。

成を待っている。

全用水路を通じ、最大の物量を投下するこの水門現場に張り付いて、足かけ五ヶ月、一月一月に入ると、北風が吹き抜ける朝の間は身震いする程寒くなって来た。まだ酷暑の名残りで、日焼けならぬ日焦げの跡が首筋にくっつきりと痕跡を残している。あの太陽に痛めつけられた炎熱地獄の日々が、何だかなつかしい気もしてくる。勝手なものである。

用水路予定地の背後には岩稜が連なっていて、草木一本とて見当たならぬ岩山は、いわば採石場に隣

接した現場でもある。各種の岩質やサイズと、お好み次第、無尽蔵の石は取り放題である。現に、地元は新築ラッシュ。基礎に使用する石を、あちこちで採っている人達を毎日見かけない日はない。我々の現場も、このタダで入手できる岩石をふんだんに活用している。無論、水門も例外ではない。石組みからレンガ積み、全ての工程を私流でやり通している。スケール片手に、いつも細部に至るまで指導して廻る。きつと現地の左官達も、あきれているに違いない。大雑把な現地人の感覚と、日本人の細かい感覚のズレ、この溝を埋めるためには、絶対に目を離すことはできない。

四連水門が完成するまであと二ヶ月、きつと今回の工事が彼らにとつて技術的に役立つことが、あとでわかる時が来る筈だ。そして、後世に残る建造物として、私の夢も残れば幸いである。今日も、ド素人で博多弁丸出しの、ひとりの変な日本人が、水門現場にいる。

『ペシャワール会報』82号(2004・12・15)より

## 取水口の改修、間一髪で決壊防ぐ

三連水門を作り終え、二週間ほどの一時帰国を果たして、再度次なる水門に取り組むべく、アフガンに戻ってきたが、待っていたのは意外にも「取水口の改修工事と恒久的にはチョキダール(守衛)小屋を作るように」との指示であった。クナール河より用水路に導水する重要な構造物であるが、相当地の突貫工事だったのだろう、各部の寸法にバラつきが見え、周辺整備は全く手を付けられていない状態である。しかし用水路本体の両壁は蛇籠じやまごに守られ、水門は分厚いコンクリートで堅牢けんろうにできているので、本体そのものは基本的に問題はなく、外観上の手直し程度で済みそうだ。現場であらゆる方

角からの実測と周辺の整備計画を練り上げ、イメージができ上がったところで、かつて一〇ヶ月間一緒に汗を流した現地仲間との面々を探しに行く。

メーソン（石工、左官）の三名は自宅待機していたが、顔を合わせるのには、たった三週間振りだというのに、非常に懐かしい思いで再会を果たす。早速連れ立って、各工区を廻っていくと、レイバー（現地作業員）のなつかしい顔とも再会できて、その現場監督であるエンジニアの了解を得た上で、明日からの仕事開始に召集する。並行して必要な資材の集積と、セメント、砂利、レンガ等の物資を発注する。

酷暑の時期が巡ってきた六月初旬、私の二作目の仕事が始まったが、全員張り切っていて、皆の笑顔がほほえましい。取水口はニングラハル州とクナル州の州境に位置しており、ここより一〇〇メートルにつき七センチの勾配を保って流れ下るように設計されている。現在工事の最先端が一四キロメートル先の、ブディアライ村という所まで伸びているが、高低差が約一〇メートルあることになる。

水量の調達は、途中にも数ヶ所の水門を設けて、万全を期した設計となっているが、いかに永続的に用水路に水を供給し続けるかは、この取水口の管理が重要な鍵を握っている。したがって、この場所を管理・維持するためには、クナル河の日々増減する水位を常時観察し、流量を調整する専任のチヨキダール（守衛）が必要であり、そのための恒久的な建物も造るのが、今回の任務であった。

工事の手順は三分割となり、一番工期のかかる周辺整備を手始めとして、次にチヨキダール小屋を造る。取水口の改修は用水路の送水を一時的に止めなければできないので、下流の農民が余り水を必要としない冬場に、第二期工事をすることに決める。その頃は次の水門工事の真っ最中でもあり、植樹もあって、三ヶ所の仕事が重複する多忙な冬となりそうだ。

周辺整備とは取水口の周辺を公園化すると同時に、地盤の補強や嵩上げ<sup>かさ</sup>を目的とする工事である。長さ約九〇メートルを、高さ一メートル石組みで嵩上げし、その上にレンガの欄干<sup>らんかん</sup>を張り巡らす。石はトルコの業者による道路の拡幅工事の際に出た、余分(?)の石が、都合良いことに道路を挟んで隣接する場所にストック場として広範囲に山積みしてある。トルコの事務所ですれを得て、それを使わせて貰うことになった。早速七名編成の石補給隊を組み、一輪車でピストン輸送にあたる。

メーソンが石組みをし、残るレイバー(現地作業員)が水汲み、砂ふるい、モルタル作りと、メーソンの補助を行う。灼熱の太陽のもと、オーブンに投げ込まれたような環境下での工事は辛い、各人が役割にも慣れ、作業は円滑に運んでいる。

ある日、クナール河の赤茶色に濁った取水口の脇で、第二期工事(冬場)の手順を考えていたが、ふと思いついたのは、取水口の水門が上下流に二基建造されていて、上流側の水門は現在の水位でも、あるいは工事可能かも知れないということ。冬場の掛け持ち工事が楽になる分だけ、片方だけでもできれば終わらせておくことに越したことはない。メーソンに相談すると、やってみようとの返事。即刻資材の手配をし、明後日から三名を振り分けての並行工事とする。ただ、偶然にもこの飛び入り工事が、近々幸運な結果をもたらすとは無論知る由もなかった。

斜めになった水門本体を直線に矯正し、凹角<sup>きょうせい</sup>になっていいる上部も嵩上げて水平にする工事であるが、本体天井部分のコンクリート型枠を固定するのに、どうしても用水路の水中より足場とつかい棒を何本も立てる必要がある。二人のレイバーが胸まで水に浸かりながらも、悪戦苦闘の末、どうやら作業を終えて笑顔で上ってきた。思わず私は握手の手を差し出していた。

「お疲れさまでした」

彼らの小刻みな震えが右手を通じて伝わってきた。

源流域をカラコルム、ヒンズークシユ山脈に発するクナール河の雪解け水は真夏でも冷たい。昨冬（〇四年冬）は降雪量が多く、その分夏期の雪解け水が、例年より増して、河の水位は日に日に上昇している。取水口より斜め堰が作られているが、その一二〇メートル先の先端部、ちょうど河の中央付近に私たちが「川中島」と呼んでいる円筒形の蛇籠があり、その中に青々と柳が繁っている。

増水は止まる気配もなく、いつしか蛇籠は水中に没し、柳の根元も洗われ始めた。朝、現場に到着するや、まず「川中島」の柳を見て、水位の上昇を観察するのが日課となった。次第に柳も激流に屈し、一本一本姿を消して最後まで残った柳も抵抗かなわず、河のモクズとなって全滅し、一抹の寂しさを隠せなかった。

泥染めにそのまま使えるような河面に、根っこがついた状態で、草木が濁流に押し流されてくる。中には羊や犬の死体もお腹をパンパンに膨らませて流れ下る、いや人間の死体さえも流れていった。一週間後、水没した畑の浅瀬に引っかけかかった米兵の死体が発見された。これは取水口の直ぐ上流で撃墜された米軍ヘリコプター二機の犠牲者一五名のうちの一人であった。

この間に取水口の工事は終わったが、なおも水位は上昇を続ける。水門の高さを五〇センチ高くしたのだが、何とその部分まで水が被っている。間一髪の工事で水は堰き止められたのだ。もし堰を越えて激流が用水路に流れ込んでいたら、下流域で決壊や農地の甚大な被害が出ていたかも知れない。偶然とはいえ、何と幸運だったのだろう。三四年ぶりの水害だったと後で聞いた。

二ヶ月半の工期を終えて、周辺整備と取水口の第一期工事は終了した。

〔『ベシヤワール会報』86号（2005・12・7）より〕

事務

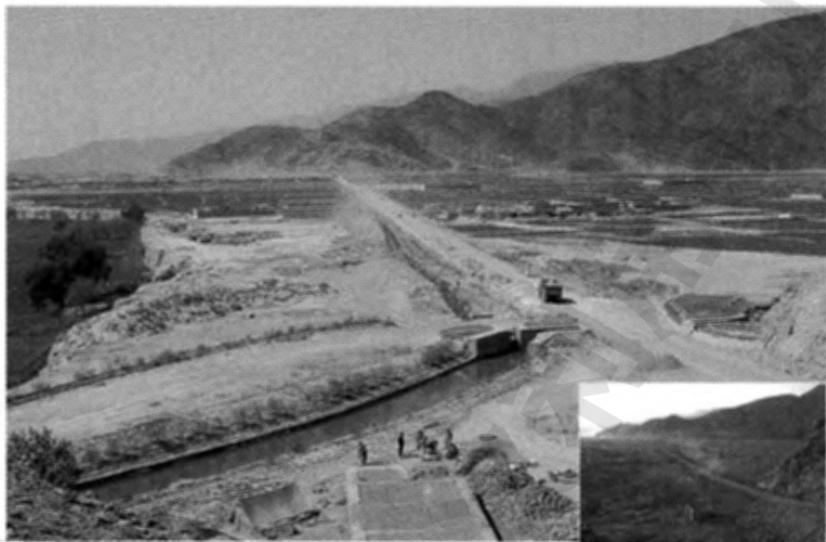
芹沢誠治

事務／渉外担当・2005～

## 住民への完全譲渡を迎え、 井戸掘り事業は最終ラウンド

私は、何かできることがあるかもしれないと、それまでやっていた小さな学習塾をたたんで、この（〇五年）四月にアフガニスタンにやって来た、新入りのワーカー見習いです。中村先生はたぶん私の六三歳という年齢と井戸屋の小せがれという出自を考慮されたのでしょう、私は井戸セクションに配属されました。子供の頃の家族絵出のトヨ打ちで、初めて水が出たときの感動がよみがえり嬉しかったのですが、私の仕事は井戸を掘る手伝いというよりも、できあがった井戸をハンドオーバー（住民へ譲渡）することでした。

というのは、私が到着する直前の三月末に、PMS（ペシャワール会医療サービス）はもう新たに井戸を掘らないこと、井戸部門をできるだけ早く閉じる方向であること、を決定していました。これにはいくつもの理由があります。一つには、PMSがこの五年間で実に一四〇〇本以上の井戸を掘り、



用水路は1500ヘクタール超の灌漑を達成した（06年3月。右下は03年2月）

すでにその役割を十分に果たしたということ。二つには、用水路の建設に莫大な予算を必要とし、井戸部門を縮小せざるを得ないこと。三つには、この五年間に戦後のアフガン社会が変化し、PMSは公共的共同使用の目的で井戸を掘っておりパブリックな性格を持っていたが、私的所有のための井戸は掘らないという態度の表明だと思えます。ただし、今後も住民のためにどうしても掘る必要があるときは、新しい井戸を掘るといふ基本姿勢を、PMSは、持ち続けていくでしょう。

ハンドオーバーとは、数ヶ月かかってようやく水が出るようになった井戸を、住民たちに完全譲渡することです。完成するまでPMSの管理下にあった井戸が住民の所有となるので、必要となる道具一式（シャベル・つるはしなど一五点）をPMSが貸与するが、今後は井戸の修理やリハビリを、住民たち自身の手で行うという契約を結ぶこととなります。これには、一つにはPMSの維持費の削減、もう一つには、住民の自立を促すという二つの大きな意味があります。

私の最初の仕事は、直径五メートルある灌漑用大井戸を五本ずつ、二ヶ所でハンドオーバーすることでした。大抵のことには驚かないつもりでしたが、これには少し驚きました。ハンドオーバーの会場（木陰の大きな広場）に行く前に、パキスタンから来られたジア副院長以下、最初に立ち寄ったのは警察署でした。カラシニコフを持った四名の警察官と、調停役と思われる二名の立会人と会場に向かったときは、いったいこれから何が起こるのかと、少しばかり心配になりました。会場には地域の長老達を含め三〇名以上が集まり、アフガン人特有の大声でカンカンガクガク、法律の専門家と思われる調停役がなだめにまわる、警察官は銃を背に監視している、パシウトウ語で何を話しているのかわからないだけに、不安が募ります。しかし一転、会議が終わるとみんな笑顔で抱擁し、和氣藹々あいきあいで終わりました。ふーむ。

その後のハンドオーバーはずっと簡略化したものになって順調に進み、六月に入って、全体で一五〇本以下となりました。しかしハンドオーバーが進むにつれて、もう一つの重大な仕事、ロダット郡とダラエ・ヌールとジャラバードのオフィスの井戸部門の閉鎖が浮かび上がってきました。井戸部門の閉鎖とは、この五年の間、ともに井戸の仕事をしてきた七〇名近いアフガン人スタッフに退職してもらうことを意味します。幸いPMSは、辞めていく人たちを手厚く遇しているので、辛い仕事とはいえ、仕事はしやすいです。私自身は、個々の人たちの話を丁寧ていねいに聞いて、その将来を思いやることしかできませんが、「この数年間、給料は安かったけれどもPMSで働いて良かった」と心から思ってもらえるように、誠心誠意の努力をするばかりです。

〈『ベシヤワール会報』84号（2005・6・29）より〉

## 苛酷で不思議な「非日常」です

昨年（〇五年）一二月半ば、事務職から灌漑用水路・コンクリート構造物建設担当への転属が決ま  
って三ヶ月、アフガニスタンに初めて足を踏み入れてから半年が過ぎようとしています。事務職の頃  
は事務所に張り付いている毎日で、用水路建設現場を見る機会になかなか恵まれません、最近やっと用水  
路事業を理解し始めたというのが正直なところですよ。

水のない所へ水を引くというこの事業に、しかも最前線の現場担当として参加させていただき、水  
は蛇口をひねればどこからか無尽蔵に出てくるものだとどこかで思い込んでいたことにも気が付くこ  
とができました。聞く人が聞いたら当たり前のことだと笑われそうですが、日本にいたら絶対に意識  
しない、できないことの一つだと思います。

今（〇六年三月一〇日現在）はI地区（取水口から約八キロメートル地点）のサイフォンが完成し、  
その周辺の造成を担当させていただいております。次はJ地区（取水口から約一〇キロメートル地点）



用水路建設現場では日本人、アフガン人がともに汗を流す

のコンクリート構造物建設が始まります。五月の小麦の収穫前までが完成目標だそうです。いつものことだとは思いますが、今度のJ地区の工事に對する中村医師の気合に何か鬼気迫るものを感じております。乗り遅れぬよう、迷惑をかけぬよう準備をしている段階です。

さて、先日、この原稿を書くにあたり、こちらでの日々を振り返ってみました。どの場面にも必ず髭面の男達が登場して、というより髭面の男しか登場してこないことに少し愕然がくとしましたが：（当たり前ですが）。事務職時代苦労した車輛のアレンジでは、夜の事務所ドライバー達と笑い話をするので随分救われました。仕事終了後の食事当番も手伝ってくれるスタッフハウスのチヨキダール（門衛）に言葉を教わりながら楽しくこなすことができました。用水路事業へ転属して一週間後の朝一番、中村医師の運転するユニポによって突然予告なしに始まった、初の担当現場の掘削は、知識・経験・準備不足の自分にとって一番慌てた出来事でした。

また、今一番の楽しみは毎日の昼飯です。らくだや羊などがパラパラと行き交う作業現場で、レイバー（作業員）と円になって食べます。力仕事の後、ハラペコで食う飯はとても美味しく、皆でがつついていきます。レイバーはほとんど皆、所謂小作農の人々で、力仕事は生まれた時から当たり前、よく喋りよく笑いよく歌い、男臭いという言葉しか当てはまらない魅力的な連中です。

思い出すと何か本当に自分の身の回りで起きていた出来事とは思えない、不思議な感覚に囚われてしまいます。少しずつパシウトウ語を話せるようになってきていて自分や、毎日レイバーと共に砂埃の舞う広大な大地を足元に力仕事に精を出している自分が、何かいつもの自分とは違う別の人間のよくな気がしてしまうのです。つい半年程前まで東京のど真ん中で走り回り飲み歩いていたので、そう感じるのは当たり前なのかもしれません……。

僕の中では未だ「非日常」が続いているのだと思います。赴任当初と比べると現地の風習や、食べ物にも慣れ、仕事にも慣れ生活の面では全てが日常になりつつあるのを実感しますが、どこか地に足が着いていない感覚は否めません。また、これだけの期間海外にいた経験は初めてで、最近、正直少し日本が恋しくなってきました。いつか一時帰国し、友人達にこっちでの出来事、感じたことを馴染みの居酒屋で一杯やりながら語る日を夢見ています。

と同時にこちらから日本に戻る時に感じる逆カルチャーショックを味わいたいと思っています。そうすることでアフガニスタンの生活を見つめ直すことができ、再び戻ってきた時には地に足の着かない浮遊感が取り払われているのではないかと期待しております。

しかし小麦の収穫時期は待つていくれません。個人的な希望は胸に秘め、気合を入れてこれから始まるJ地区のコンクリート構造物建設に取り掛かります。

灌漑用水路

杉山大二朗

灌漑用水路建設担当・2005～

殺し屋から携帯電話！

去年（〇五年）、交通事故に二度も巻き込まれて首のムチウチ症に悩まされた。水路現場への凸凹道を車で通勤したり、鉄筋曲げの力仕事等が当分の間は無理なので、中村医師から首が本調子になるまで事務仕事に配置転換する旨を伝えられた。今まで事務仕事なんぞやったことがない私だったが、日本人ワーカーは仕事経験がなくても現場に放り込まれて我流で修得してゆく（中村医師曰く、「本を読んで泳ぎ方を覚えるよりも、まず溺れて……じゃなかった、水の中に入るのが先」との由）ので、勿論仕事を覚えることに吝かではない。

しかし一つだけ事務仕事で不満がある。それは携帯電話を持つことだ。私は日本にいたときも仕事絡みで短期間だけ携帯電話を持ったことがあるが、実に嫌なものだ。事務仕事のために今は預かっているが、その煩わしさに辟易する。確かに即時性を考慮すれば、使い勝手も良からうが、伝達手段の便利さならパソコンの方が断然良いと思う。eメール通信ならば、自分の思うことをじっくり文章に



達作業員現地に従事する工建設路水用

して書けるので大いに活用している（もつとも、あまりネットは繋がらないが）。だが携帯電話だと人と大事な話をしている時に突然鳴り出すので、そんな時は思わず壁に投げつけたい衝動に駆られる。緊急の要件で電話が掛かることもあるので電源を入れておけるが、できることなら電源を切っていたい（切っていたら電話が全然掛からない、と後でスタッフからクレームが来たケド）。まったく此方こちらの事情もお構い無しに（そりゃ相手はわからんやろうケド）鳴るもんだから、今まで頭の中で考えていたことや組み立てた論理（大したこと考えてないケド）が一瞬で霧散むさんさせられるのは実に許しがたい。

アフガン人スタッフにそんな理由で説明しても彼らにしてみれば携帯電話はステイタスシンボルなのか、やっぱり持っていたほうがいいよ、とつれない返事。そういや電話が鳴って出るときはとても嬉しそうだよな。でも自分が話したいときに「ワン切り」して番号通知をオンにして相手に掛け直して貰おうとするとところが実にセコイ（私も

日本にいるときはこの技を大いに活用したが、吝嗇けちのやることは万国共通か?。」

そんなある日、憶えない電話番号が表示されたたましく着信音が鳴る。

「サラーム・アレイコム。アサドウラはいるかね?」

「は? アサドウラ? そげなスタッフおったつけ? ちよつと待つとつて」

隣にいたスタッフのサブル君に電話を代わってもらう。サブル君はしばらく相手の話を聞いていたが突然、両眼が点になってしまった。何か懸命に弁解しているようなので、好奇心も手伝つて後で何の話をしてたのかを尋ねてみた。

「サブちゃん、何の話でしたとね?」

「いやー、聞いてくれダイさん、うちはNGO（非政府組織）の仕事をやっているって説明したんだけれど、相手が頑なに誤解してね、困ったよ」

「じゃあ間違い電話なん?」

「とんでもない間違いさ。この間の仕事の話だが、奴を生かすのか殺すのか、今日これから出掛けるから最後に確認したいってさ。殺し屋からだったよ」

「そげん大事な仕事の話は電話でするとね? そんなん、ちゃんと会つて話ばせんといけんよ。サブちゃん、間違い電話やろうばつてん、そこは注意ばせんといけんよ」

「……。ああ、仕事は何より誠実さが大切だ。でも殺し屋から事後報告もあんのかな?」

現代文明の象徴である携帯電話を時代錯誤な殺し屋が使うとこういう喜劇になる。何とも微笑ましいではないか、後で返信ワン切りしてみるか。

〈『ベシヤール会報』88号（2006・6・28）より〉

## 木を育てつつ、人も育てば……

「植樹の仕事」は、簡単にいうと「木を植えること」なのだが、これがなかなか奥が深い。木の収集、場所の整地、溝作り、水遣り、人や動物からの被害防止など、様々だ。その中で、多くの時間を費やすのは、植えた後の維持管理である。これは、むしろ「育てる」と言ったほうが、ピンと来るかもしれない。「木を育てる」、これは、短期間ではできない息の長い仕事だ。悔しいが、一年関わった私でさえ、木の一生にとってはほんの一瞬に過ぎない。

そんなほんの一瞬、自分に与えられた短い活動期間の中で「では、どうすれば、ずうずう図々しくも植えた木に長く関われるか」を一年以上考えてきた。最近、実践しているのが、木を育てながら、「人も育てる」作戦である。「人を育てる」というと大げさだが、要は、「どの木が、どこに、何のために植えてある」かを、仕事を通して、知ってもらい、一家団だんらん薬や札拜の時など人が集うときに、多くの人に伝えてもらう。



全長13キロにわたる用水路には  
護岸のための柳やユーカリを植樹

こちらの人は、多くが話し好きだ。またおもしろいことに、何でも話にする。そんな、話題の一つになればいい。つまり、一種の「啓蒙活動家」。そんな人を一人でも増やせれば、と思っている。さらに、植樹、散水に携わる作業員や木を監視する見張り番は、「啓蒙」しやすいよう、できるだけ家の近い人を配置している。家の近くの木だから、と愛着を持って育ててくれれば……。」「誰でも自分で育てたものは傷つけない」そう、願っている。

植樹の仕事の実績の多くは、色々な人の目に見える「支え」があつてこそ、成り立っている。数ヶ月短期で手伝いにくてくれる人、見学とは名ばかりに作業員と共に、仕事をしてくれる医学生、ドラエ・ヌールで桑の苗木を育ててくれる農業計画の進藤さん、ペシヤワールで桑の苗木を育ててくれた藤田さん、オリーブ、桑そしてユーカリの交渉と輸送に対応してくださった事務所の芹沢さん、日本でれんげの種を収集してくださった福元さん、中島さん、そして事務所、ドライバー、現場監督など多方面から関わる現地人スタッフ、こうした後方からの支援あつてこそである。さらに、この三月に用水路を視察された、後藤会長をはじめ事務局、関東連絡会の方々、訪問者全員に桑の「記念植樹」をしていただいた。これには、目に見える支援というよりもっと強い「人のつながり」というものを感じた。用水路に水だけではなく、さらに日本で長く支援して下さっている会員の方の「気持ち」が通った瞬間だった。



灌漑用水路の取水口に集った、500人を超える現地及び日本人スタッフ

長く支援する、長く活動するということは、容易なことではない。『木を植えた男』（ジャン・ジ  
オノ原作）の中には、次のような一節がある。

「人びとのことを深く思いやる、すぐれた人格者の行いは、長い年月をかけて見定めて、はじめてそれとわかるもの。名誉も報酬もとめないまことにおくゆかしいその行いは、いつしか必ず見るともたしかなあかしを地上にするし、のちの世の人びとにあまねく恵みをほどこすもの」

これは、文字通り「木を植えた男」を指しての言葉だが、何も植樹の仕事に通じるだけでない。中村医師およびペシャワール会が行っている、長期的視野に立った用水路建設をはじめとする水源確保事業、農業計画そして医療活動すべてに通じる一節だと解釈している。そして、何度となく、その中に身を置く自分の励みにしてきた。そうした行いをする組織で、中村医師のもとアフガニスタンで二年間ワーカーとして働いたことを誇りに思う。最後になったが、今年植えたオリーブは、「平和と豊穡」の象徴である。アフガニスタンに

戦争や旱魃かんばつのない平穏な世の中が訪れることを願ってやまない。

最後になったが、植樹しんちゆうの進捗状況を報告したい。二月一日から三月一〇日の間での植樹は、以下の通り。

柳……三千本以上（すべて現地での調達が可能）／オリーブ……一千本／桑（苗木、挿し木合わせ）……二千本／ユーカリ……一千本

二年間、仕事だけでなく生活面すべてにおいてお世話になった中村先生、藤田さんをはじめ多くの現地ワーカー、私達の周りで、言葉にして話せない外国人の言うことを精一杯理解しようとし、また協力してくれた現地人スタッフと現地人作業員、日本で現地の私達の活動を全面的に支援してくださった事務局や会員の皆様、そしてイラクでの邦人拉致事件の後、悩みながらも送り出してくれた友達や家族、そうした人の協力なしにこの二年間はあり得ません。この場を借りてお礼を申し上げます。これからは、一会員として日本からできる限りの支援をしていけたらと思っております。ありがとうございます。

〔ペシャワール会報〕87号（2006・4・1）より

\*注記……二〇〇六年現在の植樹の合計は以下の通り。柳…約一〇万本／桑…約二千本／オリーブ…約二千本／あんず…三〇〇～四〇〇本